

巻 頭 言

なぜ惑星の研究をするのだろうかと改めて考えています。①惑星や衛星はどのような姿をしていて、それはどのように生じたのか、生命が誕生しえたのはなぜなのかという根源的な謎に迫る(=ルート・原理), というのは明確な目標です。惑星科学会のホームページでもこの視点が強調されています。一方で、研究の動機はこれにとどまらないひろがりを持つようにも思います。たとえば、②人類の活動範囲を拡大するため(=利用・本能)、③そこへ行くこと、記述すること自体に意味がある(=探検・博物学)、④物理や化学の応用問題として圧倒的に面白い(=謎解き)、研究者ではなく一般の目線でもそういうものだろうと思います。

私は金星探査機あかつきに長く関わってきましたが、その動機は色々でした。2001年にミッションを提案して関係各所を説得してまわっていたころは、惑星気象学を拓くのだ、金星に惑星気候形成のヒントを見つけるのだと、わりと一途に思っていました(①)、プロジェクトが走り出し、宇宙科学研究所で工学やメーカーの皆さんとともに開発やクルージング運用に明け暮れていたころは、憧れの金星に到達するのだ、自前の惑星周回機による観測を実現するのだという想いが原動力でした(②③)。2015年に探査機が金星に着いて観測データが手元に届き始め、数々の不思議な現象を目にすると、ただただ謎解きに夢中になりました(④)。これは今も続いていますが、一段落すると比較惑星学の視点も戻ってきました(①)。おそらく他のプロジェクトメンバーもそれぞれ異なる動機づけがあり、そのことが相補的に働いてプロジェクトを前に進めた気がします。

宇宙科学を取りまく状況は近年大きく変わり、従来とは違うプレーヤーの参入や新規技術によって、惑星科学に関わる動機はいっそう多様化しています。地球科学が昔からそうであったように、多様性は、変化する外的状況に即応できる柔軟性、他分野や社会との接点をひろげる拡張性にもつながります。同床異夢で良いでしょう。惑星科学会が多様な価値観を包含する懐の深い組織であり続けることを願っています。

今村剛（東京大学 新領域創成科学研究科）